

《アルジェのイタリア女》 作品解説

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』(日本ロッシニ協会紀要)第15号(1999年12月発行)の拙稿『ロッシニ全作品事典(10)《アルジェのイタリア女》』。その増補改訂版をHPに掲載します。

(2013年5月/2014年1月再改訂)

I-11 アルジェのイタリア女 *Litaliana in Algeri*

劇区分 2幕のドランマ・ジョコーゾ・ペル・ムジカ (dramma giocoso per musica in due atti)

第1幕: 全13景、第2幕: 全16景、イタリア語

台本 アンジェロ・アネッリ (Angelo Anelli, 1761-1820) がルイージ・モスカ (Luigi Mosca, 1775-1824) のために書いたオペラ台本《アルジェのイタリア女 (*Litaliana in algeri*)》(1808年8月16日ミラーノのスカラ座初演) を借用・改作。不詳の改作者はガエターノ・ロッシ (Gaetano Rossi, 1774-1855) と推測されている。

註: この台本を『ソリマン2世の美しい女奴隷ロクセラーナ』の物語に基づくとする文献も複数あるが、直接の原作とは認められない。全集版校訂者アツィオ・コルギが序文で述べたように、しばしば実際の事件から題材を採ったアネッリが、1805年にアントニエッタ・フラボッリという名のイタリア人女性が海賊に拉致され、アルジェのベイムスタファ=イブン=イブラヒムの宮廷へ連れ去られた事件にヒントを得たという仮説も成り立つ。¹

作曲年 1813年4月末~5月

初演 1813年5月22日(土曜日)、サン・ベネデット劇場 (Teatro di San Benedetto)、ヴェネツィア

人物 ①ムスタファ Mustafà (バス、B♭-g) ……アルジェのベイ (地方総督)

②エルヴィーラ Elvira (ソプラノ、e'-c^{'''}) ……ムスタファの妻

③ズルマ Zulma (メゾソプラノ、b♭-g^{'''}) ……エルヴィーラの相談相手でもある女奴隷

④アリ Haly (バス、B-f) ……アルジェの海賊の首領

⑤リンドーロ Lindoro (テノール、e'-c^{'''}) ……ムスタファに気に入られている若いイタリア人奴隷

⑥イザベッラ Isabella (コントラルト、a-b^{'''}) ……イタリア女

⑦タッデーオ Taddeo (バス [ブッフォ]、B♭-g) ……イザベッラの仲間

他に、後宮の宦官、アルジェ人の海賊、イタリア人の奴隷、パッパターチたち (以上、男声合唱 [テノール I・II、バス])、後宮の女たち、ヨーロッパ人の奴隷、船乗りたち (以上、助演)

初演者 ①フィリッポ・ガッリ (Filippo Galli, 1784-1853 初演時のプリモ・ブッフォ)

②ルットガルト・アンニバルディ (Luttgard Annibaldi, ?-? 初演時のセコンダ・ドンナ)

③アンヌンツィアータ・ベルニ・ケッリ (Annunziata Berni Chelli, ?-? 初演時のセコンダ・ドンナ)

④ジュゼッペ・スピーリト (Giuseppe Spirito, ?-? 初演時のアルトロ・プリモ・ブッフォ)

⑤セラフィーノ・ジェンティエーリ (Serafino Gentili, 1775頃-1835 初演時のプリモ・テノーレ・ディ・メゾ・カラッテレ)

⑥マリーア・マルコリーニ (Maria Marcolini, 1780頃-? 初演時のプリマ・ブッフォ・アッソルータ)

⑦パオロ・ロジク (Paolo Rosich, 1780頃-? [1840以降] 初演時のプリモ・ブッフォ)

管弦楽 1フルート/2ピッコロ、2オーボエ、2クラリネット、1ファゴット、2ホルン、2トランペット、大太鼓とバンダ・トゥルカ、カトゥーバ*、弦楽5部、レチタティーヴォ・セッコ伴奏楽器

* Catuba。打楽器の一種と思われるが特定されない。

演奏時間 序曲: 約8分、第1幕: 約62分、第2幕: 約72分

自筆楽譜 リコルディ社資料庫、ミラーノ

初版楽譜 B.Schott, Mainz, 1819c. (ピアノ伴奏譜)

全集版 I / 11 (Azio Corghi 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 1981.)

楽曲構成 (全集版に基づく)

序曲 [Sinfonia]: ハ長調、3/4拍子、アンダンテ~4/4拍子、アレグロ

第1幕

N.1 導入曲〈悲しげな瞳を晴れやかにし *Serenate il mesto ciglio*〉(エルヴィーラ、ズルマ、アリ、ムスタファ、合唱)

- 導入曲の後のレチタティーヴォ〈皆は退れ *Ritiratevi tutti*〉(エルヴィーラ、ズルマ、アリ、ムスタファ)
- N.2 リンドーロのカヴァティーナ〈美しい人に恋焦がれ *Languir per una bella*〉(リンドーロ)
 - カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈ああ、いつになったら *Ah, quando fia*〉(リンドーロ、ムスタファ)
- N.3 リンドーロとムスタファの二重唱〈妻を娶る気になったのなら *Se inclinassi a prender moglie*〉(リンドーロ、ムスタファ)
- N.4 合唱〈何と多くの物が！ *Quanta roba!*〉とイザベッラのカヴァティーナ〈酷い運命よ！ *Cruda sorte!*〉(イザベッラ、アリ、合唱)
 - カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈こうなったら *Già ci siam.*〉(イザベッラ、アリ、タッデーオ)
- N.5 イザベッラとタッデーオの二重唱〈運命の悪戯には *Ai capricci della sorte*〉(イザベッラ、タッデーオ)
 - 二重唱の後のレチタティーヴォ〈貴方に断れまして *E ricusar potresti*〉(エルヴィーラ、ズルマ、リンドーロ、アリ、ムスタファ)
- N.6 ムスタファのアリア〈すでに胸の内にとてつもない興奮が *Già d'insolito ardore*〉(ムスタファ)
 - アリアの後のレチタティーヴォ〈本当の事を言いますと *Vi dico il ver*〉(エルヴィーラ、ズルマ、リンドーロ)
- N.7 第1幕フィナーレ〈万歳、万歳、女たちの調教師 *Viva, viva il flagel delle Donne*〉(エルヴィーラ、ズルマ、イザベッラ、リンドーロ、アリ、タッデーオ、ムスタファ、合唱)

第2幕

- N.8 導入曲〈ひとりの馬鹿に、阿呆に *Un stupido, un stolto*〉(エルヴィーラ、ズルマ、アリ、合唱)
 - 導入曲の後のレチタティーヴォ〈アリ、あんたどう思う？ *Haly, che te ne par?*〉(エルヴィーラ、ズルマ、イザベッラ、リンドーロ、アリ、ムスタファ)
- N.9 リンドーロのカヴァティーナ〈おお、何とこの心は歓びに *Oh come il cor di giubilo*〉(リンドーロ)
 - カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈ああ、もし一対一で *Ah! Se da solo a sola*〉(タッデーオ、ムスタファ)
- N.10 合唱〈万歳、偉大なカイマカン *Viva il grande Kaimakan*〉、レチタティーヴォ〈カイマカン！ *Kaimakan!*〉とタッデーオのアリア〈すごい重さを頭に寄せられ *Ho un gran peso sulla testa*〉(タッデーオ、ムスタファ、合唱)
 - アリアの後のレチタティーヴォ〈(ベイのお気に召すわ *Buon segno pe'l Bey.*)〉(エルヴィーラ、ズルマ、イザベッラ、リンドーロ)
- N.11 イザベッラのカヴァティーナ〈熱愛する彼のために *Per lui che adoro*〉(イザベッラ、リンドーロ、タッデーオ、ムスタファ)
 - カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈もう抗えない *Io non resisto più*〉(リンドーロ、タッデーオ、ムスタファ)
- N.12 五重唱〈わしがみずから紹介しよう *Ti presento di mia man*〉(エルヴィーラ、イザベッラ、リンドーロ、タッデーオ、ムスタファ)
 - 五重唱の後のレチタティーヴォ〈あの自惚れをもってしても *Con tutta la sua boria*〉(アリ)
- N.13 アリのアリア〈イタリアの女たちは *Le femmine d'Italia*〉(アリ)
 - アリアの後のレチタティーヴォ〈それで君は望んでいるのか *E tu speri*〉(リンドーロ、タッデーオ、ムスタファ)
- N.14 三重唱〈パッパターチ！ そいつはいい！ *Pappataci! che mai sento!*〉(リンドーロ、タッデーオ、ムスタファ)
 - 三重唱の後のレチタティーヴォ〈それで君のご主人様は *E può la tua padrona*〉(ズルマ、リンドーロ、アリ、タッデーオ)
- N.15 合唱〈武器と人数は揃った *Pronti abbiamo e ferri e mani*〉、レチタティーヴォ〈友人よ、いかなる時も *Amici, in ogni evento*〉とイザベッラの Rondò 〈祖国のことを考えなさい *Pensa alla patria*〉(イザベッラ、合唱)
 - Rondòの後のレチタティーヴォ〈何と美しい心の持ち主か！ *Che bel core ha costei!*〉(タッデーオ、ムスタファ)
- N.16 第2幕フィナーレ〈パッパターチの合唱は前へ *Dei Pappataci s'avanza il coro*〉(エルヴィーラ、ズルマ、イザベッラ、リンドーロ、アリ、タッデーオ、ムスタファ、合唱)

物語

【第1幕】

アルジェのベイ、ムスタファの部屋。最近夫が冷たいと嘆くベイの妻エルヴィーラを宦官たちが慰めていると、主人から「お前にはもう関心がない」と言い渡される (N.1 導入曲)。ムスタファは妻を奴隷のリンドーロに与え

てイタリア女を後釜に据えようともくろみ、アリにこれを捜すよう命じて去る。囚われの身のリンドーロが独り恋人に思いをつのらせていると (N.2 リンドーロのカヴァティーナ)、ムスタファが現れ、美女を妻に娶りたくはないかと言うので、彼も次第にその気になる (N.3 リンドーロとムスタファの二重唱)。

アルジェの海岸。イタリア船を襲い、たくさんの品物と捕虜を獲得した海賊たちは、その中にとびきりの美女イザベッラを見つける。愛するリンドーロを探して囚われの身となった彼女は自分の運命を嘆きつつも、海賊たちの嘗め回すような視線を見て、色気という女の武器で切り抜けようと決意する (N.4 合唱とイザベッラのカヴァティーナ)。イザベッラの友人タッデーオは窮地に乘じて彼女にモーションをかけるが、まるで相手にされない (N.5 イザベッラとタッデーオの二重唱)。

ベイの宮殿。イタリア船の捕獲を知ったムスタファは、リンドーロにエルヴィーラを連れて帰国してはどうかと持ちかけ、自分はイタリア美女の到来を期待して興奮状態に陥る (N.6 ムスタファのアリア)。宦官たちがベイを称える合唱を歌う中、イザベッラが連れて来られる。一同その美しさに驚き、ムスタファも大満足。抵抗したタッデーオが死刑宣告されると、イザベッラが「彼は私の叔父です」と言って救う。そこにエルヴィーラとリンドーロが暇乞いに現れる。ムスタファから妻をリンドーロと結婚させると聞いたイザベッラは野蛮な風習だと批判、「リンドーロを私の奴隷にします」と宣言する。何が何やら判らず、一同頭が混乱する (N.7 第 1 幕フィナーレ)。

【第 2 幕】

ベイの宮殿。エルヴィーラと宦官たちがイタリア女の手管に呆れ、ベイに忠言するが聞き入れられない。一方、誤解を解いて仲直りしたイザベッラとリンドーロは逃亡の計画を練る (N.8 導入曲)。リンドーロは恋人の怒りが鎮まったので、嬉しくてたまらない (N.9 リンドーロのカヴァティーナ)。タッデーオをイザベッラの叔父と信じたムスタファは、彼にカイカマンという地位を与える代わりに彼女の心を自分へ向けるよう頼む。死刑になるよりまし、とタッデーオも提案を受け入れる (N.10 合唱、レチタティーヴォとタッデーオのアリア)。

豪華な館の 1 階。トルコ服を着たイザベッラが、「亭主なんて女房次第でどうにでもなる」とエルヴィーラに話している。そこにベイが来ると、イザベッラは色気たっぷりに振舞う。すっかり舞い上がるムスタファ。しかし、リンドーロは彼女の真意が判らず誤解してしまう (N.11 イザベッラのカヴァティーナ)。イザベッラと 2 人きりになりたいムスタファは、自分がかしまをしたら皆を下がらせるようにタッデーオに命じる。だが、何度くしまみをしても誰も動じないので怒り始める (N.12 五重唱)。

宮殿の一室。アリがイタリア女のしたたかさに感心している (N.13 アリのアリア)。一方、イザベッラに惚れられていると勘違いしたタッデーオを仲間に入れたリンドーロは、「パッパターチ」という結社を作るようムスタファに提案する。パッパターチとは「女に囲まれ、寝て、食べて、呑むこと」と教えられ、ベイはすっかりその気になる (N.14 三重唱)。

再び館の 1 階。イタリア人奴隷全員を解放する計画を知り、男たちの意気も上がっている。イザベッラは、「イタリア男の勇気を見せて頂戴」と言って彼らを鼓舞する (N.15 合唱、レチタティーヴォとイザベッラのロンド)。やがてパッパターチの入会儀式と称してムスタファに、「見ても見ない、聴いても聴かない、食べるだけ食べて他人が何をしてもほっておく」との誓いをたてさせ、一同船に乗り込んでしまう。ムスタファが騙されたと感じたときは後の祭り。イタリアの女はこりごり、とベイもエルヴィーラに許しを乞う (N.16 第 2 幕フィナーレ)。



初期楽譜(シュレザンジェ社、パリ、1826 年頃。筆者所蔵)

解説

【作品の成立】

1813 年 2 月 6 日にヴェネツィアのフェニーチェ劇場で初演した前作《タンクレーディ》は大成功を収めたが、3 月 6 日の上演を最後に謝肉祭シーズンは終りを告げた。この年フェニーチェ劇場は他のシーズン興行を予定せず、続く春のシーズンはサン・モイゼ劇場とサン・ベネデット劇場でオペラの上演が予定されていた。4 月 19 日、サン・ベネデット劇場は前年秋にスカラ座で初演されたロッシーニの《試金石》で幕開けしたものの、意外なことに人気芳しくなかった。詳しい資料は残されていないものの、この時の興行師ジョヴァンニ・ガッロ (Giovanni Gallo, ?-?) がシーズンのなりゆきを危惧し、急遽ロッシーニに新作を依頼したものと推測されている。

《タンクレーディ》のフェッラーラ再演のためヴェネツィアを離れていたロッシーニは、4 月末頃に帰還すると大急ぎで新作に取り掛かったが、新たな台本ではなく、アンジェロ・アネッリ (Angelo Anelli, 1761-1820) の《アルジェのイタリア女 (Litaliana in Algeri)》を借用することにした。この台本はルイージ・モスカ (Luigi Mosca, 1775-1824) によって作曲され、1808 年 8 月 16 日ミラーノのスカラ座初演も成功を収めていた²。イタリアの美女が海

賊に囚われ、異教徒の宮廷に連れ去られるという題材は必ずしも目新しいものではなかったが、「トルコもの」「イスラムもの」は18世紀半ばから流行しており、エキゾチックな舞台にトルコ軍楽風の音楽を盛り込めばヒット間違いなし、という読みもあったに違いない（このジャンルのオペラにモーツァルトの《後宮からの誘拐》、ヴェーバーの《アブ・ハッサン》があり、ロッシーニも後に《イタリアのトルコ人》と《アディーナ》を作曲する）。

ロッシーニは序曲（シンフォニア）と主要ナンバーだけを作曲し、レチタティーヴォ・セッコの作曲を不詳の協力者に委ねた（但し、第10曲に含まれるタッデーオのレチタティーヴォはみづから作曲）。この協力者は1808年のスカラ座印刷台本を使ってレチタティーヴォを作曲したが、ロッシーニはテキストの追加や台本の改作を必要とした。そして第1幕にあったタッデーオのカヴァティーナとリンドーロのアリアを除外し、導入曲のムスタファ登場場面と第6曲のアリアを追加、さらに第2幕イザベッラとリンドーロの二重唱をソロにし、第1幕フィナーレのアンサンブルも大きく内容を変更し、第2幕イザベッラのカヴァティーナのための新たなテキストを求めた。一連の台本改作とテキスト追加を行なったのは、《タンクレーディ》の台本作家でサン・ベネデット劇場のために新作を書いていたガエターノ・ロッシ（Gaetano Rossi, 1774-1855）と全集版校訂者によって推測されている³。

ロッシーニは父ジュゼッペに宛てた5月8日付の手紙に、「サン・ベネデット [劇場] のためにオペラを一つ作曲中です」と記しているが⁴、その後初演までの間に書かれた手紙は現存しない。作曲期間は初演2日後の『ジョルナーレ・ディパルティメンターレ・デッラドリアーティコ（*Giornale dipartinetale dell'Adriatico*）』（5月24日付）が「27日間」、同時代にライプツィヒで出版された『一般音楽新聞（*Allgemeine musikalische Zeitung*）』が「18日間」としている⁵。前者が事実なら4月末から着手したことになり、後者では5月中の作曲となる。いずれにしても1カ月の猶予もなかったことになり、ロッシーニが書き急がねばならなかったことはイザベッラのカヴァティーナ〈熱愛する彼のために（*Per lui che adoro*）（N.11）のテキストが第三者の筆跡で書かれ、リンドーロのカヴァティーナ（N.9）が自筆楽譜を欠き、アリアのアリア（N.13）がレチタティーヴォの作曲者の筆跡で書かれたことにも表れており、この二つのナンバーがロッシーニ自身の作曲である可能性は乏しい。

初演歌手団には《ひどい誤解》《バビロニアのチーロ》《試金石》の主演を創唱したマリーア・マルコリーニ（*Maria Marcolini*, 1780頃?）と、《幸せな間違い》と《試金石》の初演歌手フィリッポ・ガッリ（*Filippo Galli*, 1784-1853）が含まれ、どちらもロッシーニと親しい関係にあった。彼らの主演した《試金石》初演も大成功を収めたことから、稽古も順調に運んだに違いない。こうして迎えた5月22日の初演が熱狂的成功を収めたことは、前記新聞批評でも確かめられる。そこでは歌手全員が称賛されているが、なかでも「優れた歌手にして最も卓越した役者」であるマルコリーニの歌ったロンド（N.15）が、「優美に、彼女の広い声域すべてを駆使する巧みな唱法によって聴衆を法悦境に誘った」と絶賛されている⁶。

【特色】

《ひどい誤解》《試金石》に続くこの《アルジェのイタリア女》は、オペラ・ブッフアのジャンルにおけるロッシーニ最初の傑作といえる。スカラ座初演《試金石》の優れた歌手たちを前提に非常な熱意で作曲したことは、魅力的な序曲（シンフォニア）、第1幕フィナーレ、イザベッラのロンドなど完成度の高い一連のナンバーが証明し、ロッシーニの喜劇的天分もリンドーロとムスタファの二重唱〈妻を娶る気になったのなら（*Se inclinassi a prender moglie*）（N.3）〉、第2幕の五重唱〈わしがみづから紹介しよう（*Ti presento di mia man*）（N.12）〉、パッパターチをめぐる三重唱〈パッパターチ！ そいつはいい！（*Pappataci! che mai sento!*）（N.14）〉に遺憾なく発揮されている。白眉は第1幕フィナーレ後半のアンサンブルで、リンドーロとイザベッラの再会に端を発する狼狽と混乱が全員の狂騒に発展し、スピーディで躍動感あふれるストレッタで締め括られる。これが歌い終わると「観客は息もつけずに涙をぬぐっていた」（スタンダード『ロッシーニ伝』第3章）というのもけって誇張ではなからう。7人の歌手が早口で疾走するアンサンブルの妙味、ディン、ディン、タク、タクといった擬音の堆積から驚くほどの感動が湧き上がってくる、そうした稀有な音楽なのである。

ロッシーニのヒロインが成熟した女として登場するのも、イザベッラ役が最初とあってよい。彼女の色気と媚態は登場のカヴァティーナ〈酷い運命よ！（*Cruda sorte!*）（N.4）〉やアンサンブルの随所に見られるが、それは当時ロッシーニと恋愛関係にあったと伝えられるマルコリーニの色香の反映にも思われる。ちなみに彼女は12歳ほど年上で、ロッシーニのためにリュシアン・ボナバルト公を袖にしたという（スタンダード前掲書）。

イザベッラ役のアジテーターとしての側面は、第2幕の〈祖国のことを考えなさい（*Pensa alla patria*）（N.15）〉に見て取れる。フランス革命歌《ラ・マルセイエーズ》を隠し持つ冒頭合唱に続いて「祖国のことを考えなさい。そして勇気をもってあなたの義務を遂行するのです」と歌われるこのロンドには、外国支配と圧制によって蹂躪され続けるイタリア人への扇動的なメッセージが込められている。その後半部の超絶技巧について、スタンダードはこう書く——「（このロンドは）マルコリーニ夫人に離れ業を演じさせるための曲なのだ。歌手にとってこれ

ほど大変なオペラの大詰めで、ルーラードだらけの大アリアを歌える強靱な肺を備えたプリマ・ドンナが他に見つかるだろうか」⁷。

リンドーロ役は登場のカヴァティーナ〈美しい人に恋焦がれ (*Languir per una bella*) (N.2) が秀逸で、ホルン独奏のオブリガートを持つカンタービレとハイ c の頻出する技巧的なカバレッタからなり、人気を博した。作曲を第三者に委ねた 2 曲について付言すると、第 2 幕リンドーロのカヴァティーナ〈おお、何とこの心は歓びに (*Oh come il cor di giubilo*) (N.9) はロッシェニ風ではあるものの音楽的に弱く、アリのアリア〈イタリアの女たちは (*Le femmine d'Italia*) (N.13) はモーツァルト《魔笛》パパゲーノのアリアに似た作風で、このオペラのシャーベット・アリアとして違和感があり、ロッシェニがみずから作曲しなかったことが惜しまれる。



レチタティーヴォを含む全曲ピアノ伴奏譜初版
(リコルディ、ミラーノ、1829-30 年。筆者所蔵)

【上演史】

《アルジェのイタリア女》の初演は成功を収め、上演は 6 月 30 日まで続いた。最初の再演は同じ歌手団が 1813 年夏(おそらく 7 月頃)にヴィチエンツァのエレターニオ劇場で行い、その際に第 1 幕イザベッラのカヴァティーナが〈風と波に揉まれて (*Cimentando i venti e l'onde*) (全集版 N.4b) に変更された(この差し替え曲は初演時に作曲されていた可能性もある)。1814 年 4 月のミラーノ再演(ヌオーヴォ・テアトロ・レ)ではロッシェニが改作を施し、第三者に委ねた第 2 幕リンドーロのカヴァティーナを新たなレチタティーヴォ〈みじめだ!…ぼくはどうしよう? (*Misera!...che farò?*)〉とカヴァティーナ〈授けておくれ、慈悲深き愛よ (*Concedi, amor pietoso*) (全集版 N.9a) と差し替え(但しカバレッタは《タンクレーディ》の差し替えアリア〈甘き愛の言葉 (*Dolci d'amor parole*)〉から転用)、イザベッラの二つのカヴァティーナにも手を加えている(全集版はこちらを採用し、オリジナル・ヴァージョンを N.4a、N.11a として補遺に掲載)。ロッシェニの改作は 1815 年 10 月 28 日ナポリのフィオレンティーニ劇場再演でも行われ、イザベッラのロンドが新たなレチタティーヴォとアリア(全集版 N.15a レチタティーヴォ〈なぜ笑うの、ポンペーオ? (*Perché ridi Pompeo?*)〉とアリア〈旅人のふるまひは (*Sullo stil de' viaggiatori*)〉と差し替えられた。これはイザベッラのロンド〈祖国のことを考えよ (*Pensa alla patria*)〉が検閲に抵触したためと思われる(これに先立つ 1815 年 14 日ローマのヴァッレ劇場上演では検閲官によって《幸せな難船 (*Il naufragio felice*)〉と改題され、〈祖国のことを考えよ〉の「祖国 (*patria*)」は「妻 (*sposa*)」に変えられた)。

このオペラはただちに人気を博し、初演の 1813 年にヴィチエンツァ、トリノー、ラヴェンナ、翌 1814 年にはトリエステ、ミラーノ、フィレンツェ、パドヴァ、ボローニャなど 10 都市以上の劇場で上演された。国外でも 1815 年 8 月 29 日のバルセロナを皮切りに、翌 1816 年にミュンヘンとマドリード、1817 年にパリとウィーン、1818 年にリスボン、シュトゥットガルト、ブカレスト、1819 年にロンドン、グラーツ、アムステルダム、ワルシャワ、ブダペスト……と、瞬く間に世界中に流布した(1824 年にメキシコで北米初演、1826 年にブエノスアイレスで南米初演、1829 年にサンクト・ペテルブルクでロシア初演、1832 年 4 月 24 日にニューオリンズのオルレアン劇場でアメリカ初演も行われた)。近代の重要な再上演にヴィットーリオ・グイ指揮の 1925 年 11 月 26 日トリノー(テアトロ・ディ・トリノー開場公演。イザベッラ:コンチータ・スベルビア)があり、グイによれば、翌年の再演に列席したリヒャルト・シュトラウスがこのオペラの素晴らしさに狂喜したという⁸。

ロッシェニ財団の批判校訂版による初上演は 1981 年 8 月 19 日、ペーザロのロッシェニ・オペラ・フェスティヴァルで行われた(演出:エジスト・マルクッチ、指揮:ドナート・レンツェッティ、イザベッラ:カルメン・ゴンザレス)。日本初演は 1967 年 9 月 28 日に東京藝術大学(第 13 回藝大オペラ公演)が《アルジェリアのイタリア人》の題名で行ない(渋谷公会堂。演出:長沼廣光、指揮:ニコラ・ルッチ。原語上演)、商業公演としては 1972 年 7 月 18 日のステファノ・オペラ劇場公演が最初となる(都市センターホール。演出:ステファノ・木内、指揮:堤俊作。訳詞上演。題名は《アルジェリアのイタリア女》)。



1981 年 ROF
プログラム(筆者所蔵)

推薦ディスク

- ・Denon COBO4951 (国内盤 DVD。日本語字幕付) (1998 年 4 月パリ・オペラ座上演ライブ) アンドレイ・セルバン (演出) ブルーノ・カンパネッラ指揮パリ・オペラ座管弦楽団&合唱団 ジェニファー・ラーモア (イザベッラ)、ブルース・フォード (リンドーロ)、シモーネ・アライモ (ムスタファ)、アレッサンドロ・コルベッリ (タッデーオ) 他

- ・ Dynamic DYNDVD33526 (海外盤) (2006年8月ペーザロ、ロッシーニ・オペラ・フェスティバル上演ライブ) ダリオ・フォ (演出) ドナート・レンツェッティ指揮 ボローニャ市立歌劇場管弦楽団、プラハ室内合唱団 マリアンナ・ピッツォラート (イザベッラ)、マキシム・ミロノフ (リンドーロ)、マルコ・ヴィンコ (ムスタファ)、ブルーノ・デ・シモーネ (タッデーオ) 他



- ¹ 原作に関する従来の説は、全集版《アルジェのイタリア女》(ロッシーニ財団、1981年)序文で再検討されている。
- ² モスカの《アルジェのイタリア女》は復活上演されており、全曲ディスクもある (Bongiovanni GB2275/76-2)。これを聴くと、歌詞を旋律化する際の着想、装飾的パッセージの挿入、喜劇的語法、アンサンブルと管弦楽の用法、リズム感など、ロッシーニ作品と細部にわたって似ていることが判る。
- ³ アンジェロ・アネッリの原作台本とロッシーニ作品の台本比較研究は、*L'ITALIANA IN ALGERI* (I libretti di Rossini 4 [a cura di Paolo Fabbri e MariaChiara Bertieri]), Fondazione Rossini, Pesaro, 1997. を参照されたい。
- ⁴ Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Fondazione Rossini, Pesaro, 2004., pp.39-40. [書簡 IIIa.17]
- ⁵ 全集版《アルジェのイタリア女》序文 p.XXIV.
- ⁶ Ibid.
- ⁷ スタンダール『ロッシーニ伝』(山辺雅彦訳、みすず書房、1992年) 65頁
- ⁸ Giuseppe Radiciotti, *Gioacchino Rossini. Vita documentata. Opere ed influenza su l'arte III*, Arti Grafiche Majella, Tivoli, 1929., p.202.)